

春の日

小川未明

青空文庫

もう、春はるです。仲なかのいい三人にんは、いつしよに遊あそんでいました。

徳とくちゃんなは、なかなかのひょうきんもので、両方りやうほうの親指おやゆびを口くちの中なかに入れ、二本ほんのくすり指ゆびで、あかんべいをして、ひよつとこの面めんをしたり、はんなにやの似顔にがおをして見みせて、よく人ひとを笑わらわせました。とし子こさんは、おこりんぼでちよつとしたことでも、すぐにいぼをつつてしまいます。そうすると武たけちゃんなと、徳とくちゃんなは、つまらなくります。二人ふたりが、いろいろに機嫌きげんをとつても、とし子こさんは、笑わらいもしなければ、ものもいけません。

そんなときです、徳とくちゃんなは、いつもする得意とくいの、指ゆびを口くちに入れて、あかんべいをして、とし子こさんの顔かおをのぞきます。さすが

に、いぼつりのとし子さんも、これを見ると、くすくすと笑ひ出して、じきに機嫌を直すのが例でありました。

武ちゃんには、徳ちゃんのように、そんなひょうきんのまねはできませんでしたから、もし、とし子さんと二人のときに、どうかして、とし子さんが、いぼをつれば、

「としこさんのばかやい。」といつて、悪口をいうか、なぐりつけるのが関の山で、とし子さんも、

「だれが遊ぶもんか。」と、いって、泣きながら、帰つてしまひます。

しかし、三人は、いつとはなしに仲は直りますが、もし、徳ちゃんがいなかったら、そう容易に打ち解ける糸口が見つからな

かつたかもしれません。

ある日^ひのことでした。三人^{にん}は、いつしよに、お濠^{ほり}の方^{ほう}へ歩いてゆきました。雪^{ゆき}が消^きえて、水^{みず}がなみなみと、午後^{ごご}の日^ひの光^{ひかり}に輝^{かがや}いていました。土橋^{どばし}のところへは、よく、あめ屋^やや、おもちゃ店^{みせ}がでています。

この日^ひは、珍^{めづ}しく、紙芝居^{かみしばい}のおじいさんがきていました。
「紙芝居^{かみしばい}だね。」

「おもしろいな。」

そんなことをいい合^あつて、おじいさんの方^{ほう}へ走^{はし}つてゆきました。

* * * *

おじいさんは、五、六人^{にん}の子供^{こども}を前^{まえ}に集^{あつ}めて、お話^{はなし}をしていま

した。

——王さまは、戦争からお帰りなされると、その美しいお后をおもらいになりました。三國一の美人ですけれど、まだお笑いになつたことはありません。どうしたら、愛するお后が笑ってくれるだろうか？ 王さまは、山と宝物をお后の前に積まれました。けれど、やはりお笑いにはなりませんでした。

御殿のお庭に、鐘がつるされていました。

「この鐘を、なんになさるのでございますか。」と、お后が、王さまにお問いになりました。

「この鐘は、私が、忠勇の兵士をここへ呼び集めるときに、鳴らす鐘だ。これを鳴らせば、たちどころに、城下に住む三万

の兵士^{へいし}たちは、ここへ集^{あつ}まつてくるのじゃ。」

「どうか、この鐘^{かね}を鳴^ならしてみせてはくさいませんか。」

「ばかなことをいうものでない。ほかの願^{ねが}いならなんなりときいてやるが、この鐘^{かね}は大事^{だいじ}があつたときのほかは、鳴^ならされないのだ。」

「これほど、願^{ねが}いしても、おききくださらなければ……。」「王^{おう}さまは、愛^{あい}するお后^{きさき}の機嫌^{きげん}を損^{そん}じたと思^{おも}ひ召^めされて、家来^{けらい}に命^{めい}じて、鐘^{かね}をお鳴^ならしになりました。」

すると、「すわ、大事^{だいじ}だ！」と、いつて、三万^{まん}の兵士^{へいし}は、取^とるものもと^いりあえず、軍^{いくさ}の仕度^{したく}をして、御殿^{ごてん}のまわり^{あつ}に集^{あつ}まりました。

これをござらんになった、お后は、はじめで、からからとお笑い
なさいました。

何事なにごともなかったとわかると、兵士へいしたちは、そのまま帰かえつてしましました。

お后は、鐘かねを鳴ならしただけで、あの先さきを争あらそつて集あつまった兵士へいしたちのようすを、もう一度見どみたいと思おもわれました。

「もう一度あどの鐘かねを鳴ならしてみせてください。」

王おうさまは、美うつくしいお后きさきの笑わらいをござらんになりたいばかりに、また鐘かねをお鳴ならしなさいました。鐘かねの音ねをきくと、兵士へいしたちは、取るものもととりあえず、軍いくさの装しょうぞく束みに身かたを堅まめて、前まえと同じようおなに、御殿ごてんのまわりあつに集あつまってまいりました。これをござらんになつ

たお后きさきは、おもしろがつて、からからと、ころげるばかりに、お笑いわらなさいました。

それから、幾いくつ月も間がなかつたのであります。やぐらに登のぼつて見張みはりをしていた家来けらいが、あわてて降おりてきて、

「たいへんです、夷えびすの軍勢ぐんぜいが、押おし寄よせてまいりました。」と、王おうさまに、お告つげしました。

王おうさまは、お驚おどろきなされて、さつそく、鐘かねをお鳴ならせになりました。しかし、二度ども、だまされた人ひとたちは、またかといつて、だれもくるものがありませんでした。それがために王おうさまとお后きさきは、ついえびすに夷ぐんぜいの軍勢ぐんぜいのために、浮虜とりことなつてしまいました。――

おじいさんのお話は、終わりました。

* * * *

三郎は、肩をならべて、お家の方へ帰りました。

昔、支那にあつた、ほんとうの話だつてね。」と、武ちゃんが、

いいました。

「ばかな、王さままだなあ。」と、徳ちゃんが、考え深そうに、い

まの話を思い出しながらいいました。

「私、あんな后きらいよ。」と、とし子さんが、恥ずかしそうに

していいました。

あちらには、春の黄昏方の空が、うす紅く、美しい、夢のよう
うに見られたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 Ⅱ」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店

1936（昭和11）年12月

初出：「教育・国語教育」

1936（昭和11）年3月

※表題は底本では、「春《はる》の日《ひ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春の日

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>